

一日一年

重い杵きねの音が、今日も朝から土間どまを震源地しんげんちとして家中に傳はった。どしりどしりと打ち下される度に、重ねた輪の中へはらはらと米が頽れ落ちて、響きの波は近い茶の間の床に押しあげて這ふ。其度に茶箆ふる筥の中の茶器が慄えて、中庭の梁はりに吊した洋燈らんぶが囁くやうにかちかちと鳴なった。

軒の低い家の中は見付みつが薄暗い。下した葺しとの一枚は障子で、糒かうじ、かうじと書いた太い字のところどころが破れて、隅には大津屋と屋號が書いてある。荷車が一輛投げ出された軒の下に、脚を隠したやうな矮鶏ちやぼが二匹かじかんだやうな容子をしては羽蟲はむしを捕つて居る。隣は生命保険代理店の看板をかけた小さな酒店で、味噌醬油の類も賣つて居る。斜向はすかひが馬車宿で、大抵いつも炭をつけた荷馬車の一二臺は道を塞ふさいで居る。少し離れた糸店のペンキ塗りの看板も此頃は色が褪めて、眞向ひの鍛冶屋からは絶えずとんかんとんかんと槌つちの音が聞えて居る。お高祖頭巾をした人が傘の奥深く手を差し入れて、解けかけて下駄の齒のまゝ凍った朝の道を、歩き憎さうに辿々たどたどと行く後から、槌の音につれてぱつぱつと火花が散った。

東北のSといふ一寸した町、それもこゝらは横にはいつた場末ばすゑである。

各自てんでに小さな雪掻きを持った子供達が、男も女も六つか七つ位なのが、足袋の先を汚して泥交りの雪をこねくつて居た。そのうちから一人の女の子が、思ひ出したやうに雪掻きを投げ出して、

『まっ——』と言ひながら大津屋の戸をあけてはいって行つた。

『おつ母ちやア 何か。』と上り框かまちに寝そべるやうにして泥の下駄を高くあげる。

『えいお母ちやア。』

『またか—— 何なんにも無いわいはア。』

佛壇の前の暗い炬燵の中から眠さうな聲が起つた。

『んゝん、そんぢやら錢ぜに！』

『先刻使ったばかりで無えか。』

『んゝん、錢ぜにイ、え、錢ぜにつてばア。』

『仕様が無いなア眞ほんに、たった今使ったばかりで……そら錢櫃ぜにびつを持つて來う此處さ。』

屏風の影に横になって居た首がやうやう起き直った。女の子は初めて下駄を抜いてあがって、帳場の上から小さな錢箱を持つて行つた。がちやりと置くと、

『靜にしなんしょ。』と寢ねせ抜ぬかした子供の顔に目を落とす。

『そら！』と五厘の銅貨を投げて貰つて、ぴたりと飛び下りるやうに急いで庭に下りてまた表へ出て行つた。

全身に行き渡つた炬燵のほとぼりが、どうしても眠氣を誘つて、擴ひろげた脚元に片手を差し入れたまゝ、母親はこくりこくりと居眠りを初めた。

米搗こめつく音がどしりどしりと緩く腹に響く。

『およね、およね、吉田屋さ錢取りにやつたか——』

忙せわしさうな主人あるじの聲が裏口に聞えたので、およねはびっくりとして目を開いた。

『いゝえ、まだやりやせんでしたぞい。』と炬燵の中で答へた。さうしてまたうとうとなりかけた。

『やんなくちや駄目だぞ、何時まで經たつたつてそんで無けりやあ寄越ひろしつこねえんだから……常が歸つたら直ぐにやれよ。』

いひいひ窘むろから出て來た主人あるじは、股引の足を折つて爐傍ろばたに坐つて、自在の鐵瓶を下げ火を掘り起し、煙管きせるを抜いて煙草をつめて火をつけるのを忙せわしくやつた。

底ぬくの温みが度を増して來ると、鐵瓶の湯はチーンチーンと幽かな音をたてはじめた。

二三服たて續けに吸つて、後の一服を口から離して煙の蜿うねるのに任せながら、主人あるじは暫くあれこれと胸算用をやつた。

大津屋の亭主は松之助といふのだが、別にチョン髷まげ松まげつあんといふ渾名あだながある。今は人並みに髪を五分刈りにして居るが、窘むろにはいるのには上のぼせて不可いけいと言つて濃い房々とした毛を立てゝチョン髷さかやきに結つて居た。月代をいつも青々と剃そつて居ると、至極頭の具合がいゝと言つて暫くさうして居たが、一年總領の娘を嫁やつた開業醫が、北海道に行つて開業

するといふので、後から娘を送って行くに就てそれを切つてしまった。

娘は間もなく女の子を生んだ。それが今年はまだ五つになる。

捻ねぢのゆるんだ時計がボンボンと十一時を打った。それを聞くと主人は堪らんと云ったやうに慌てゝ起つて

『およね そこ少し片づけたらいゝんでねえか。』と言いながらまた草履をつつかけて害むろの方へ行つた。

『はあ。』と時過ぎてのろい返事をしながら、およねはやうやう炬燵から出て來た。一伸びのびて襷たすきを拾ひ、そこら一ぱいに散らかつて居た子供の着物を屏風に掛けて流し元に出て朝のまゝの膳ぜんを洗ひにかゝつた。

ざアつ ざアつと箕みを通す米の音が驟雨にはかあめのやうに起つた。

『只今——』と表から大きな聲をして次男の常吉が歸つて來た。

『おつ母さ、あのない。』と鞆たもを放り出したまゝ臺所に出て行くと、板の間に飛んだ粉糠こなぬかに足跡がついた。

『おつ母さ 己おれに錢ぜに二錢せんおくれ、消ゴム買かんだから、ええ。』

『おゝ 持つてげ 錢櫃ぜにびつから、二錢だけだぞ。』

『んゝ。』

『それからなア常や、お晝喰べたらまた吉田屋さ行つて來なくちやならないぞ。』

『んゝ。』

『もう直ぐにおまんまだから遊んでんでねえぞ。』

『んゝ。』

常吉は錢櫃ぜにびつをがたがたいはせて出て行つた。

箕みの音が止んではたはたと手拭ひで肩のあたりを叩く音がする。

『そらもう虎さんのお晝だ。』と思ひながら、およねは澤庵たくあんを出して糠ぬかを洗ひ流した。

米搗こめつき男の虎さんはやがて板の間に腰を下して、今朝の残りを暖めたのを貰つた味噌汁を啜りながら、四角な箱の大きなお辯當を出して、澤庵をぼりぼり噛んだ。

『お晝ですぞい、お父つあ お晝ですぞい。』とおよねは流し元から害むろに聲をかけて居る。

『どうしたい虎さん、今度の米もやっぱり減るかい。』

こんな話が楊枝やうじを使ひながら初はじまつた。

『なんだかあんまり思ふやうでありやせんね、それでもこの前の年よりあ少うし乾ひがいゝやうだ。』

『さうかない、今年は何家どこでも升ますが出ねえっていうて。』

『常はなア、吉田屋さ行ぐ序ついでに岸本の煎餅を買つて來てくつりよや、十錢ばかりな。』

『んゝ、お父つあ吉田屋の書付何處さ置いたの。』

『其處の状挿じようさしにさしてたつけ、有ったか、無いなか、随分長くなつたんだから今日は是非ともやっておくなんしょってな。』

『はあい、行つて來やす。』

『道が悪かつぺから高い方の下駄を履いて行くもんだぞ。』

『そんぢやつて、あれコロチャラして轉ころぶんだもの。』

常吉は淺黄の風呂敷を持って、爪先の腐つた足駄あしだをつつかけて出て行つた。それと入り違ひに、赤兒あかじを肌におぶつた十三ばかりの女の子がはいつて來た。

『今日は。』とお時儀じぎをして『あの今夜無盡むじんですから來ておくなんしょと。』

『はあさうけ、それはどうも御苦勞さんでした。』

『さいなら。』

報告がすむと女の子はちよこちよこと小走りに出て行く。

『およね、今日は土曜日だな。』と主人あるじは初めて氣が付いたやうに、

『お藤が來るな。』と獨り言ともつかず言つた。

町から二里半ばかり離れた村の小學校に、雇い教員として奉職ほうしよくして居る二番娘のお藤は日曜日をかけて大抵の土曜日には必と歸つて來る。村のお寺の小さな部屋を借りて自炊をして居るのだ。八圓ばかり貰つて居るのだが、米や味噌は家から運んで、小使以外の月給は皆貯金にして置く。町の小學校を出るときから、ぼつぼつ勉強をして、師範學校にはひつて正教員になる積りだったのだが、一度試験を受けて旨く行かなかつてから、いろいろな事情があつて師範學校入學は此頃斷念した。さればといつてなかなか自費の學校へはい

れるやうな家柄でもないので、どうにかなる積りで二三年この方せつせと學校に勤て其俵給を貯金にした。

白く斑の雪を着た那須連山を後にして、蹄ひづめの跡で耕たがやされたやうな村の道を歸つて來ると、道で會つた子供達は皆極りが惡さうな顔をしてお時儀をする。通りがかりの家に梭をさの音が止んだと思ふと、先生、女の先生などといふ小さな囁きが聞えた。

いざ町にはいったとなると、間に合せのシヨールや素朴じみな柄の着物の木綿なのをお藤はいつも思った。

なるたけ足を汚すまいとして歩いた故せいか、今日は何時もなく疲れたやうに覺えて、家に着いた時丁度赤子あかこが火のついたやうに泣いて居たのを非常に煩うるさいと思った。

『只今。』と、とにかく汚れた足袋を緒をに組んだまゝ脱いで上ると、

『お藤かい、なんぼか道が惡かつたつぺ。』と炬燵の中でおよねの聲がした。

『あ——あ。』と思はず疲れたやうな聲を出して、

『清ちゃんはどうしたの。』と一寸屏風の上から覗き込む

『ほうらよしよし、どうしたんだい一體、ほうらお乳お乳、ほらよしよしお藤姉ちやが來たんだぞい。』

子供はなかなか泣き止まなかった。

お夕飯の支度にはお藤も手を出して、鮭を焼く匂ひなどが臺所を漂った。主人あるじは珍らしく一本つけて貰つて、藥味の唐辛を浮かした汁を啜りながら、久しぶりでゆつくりしたといふやうに種々ちよちよな話をお藤にしかけた。

『ふうむ、そんぢやらなんだな、和尚さまは氣前がいいんだな。』

『えゝ和尚さまはお饅頭でもなんでも貰ふと直ぐに持つて來てくれるけれど、をばさんは同じ呉れるにしても固くなってからでなくちや呉れたことが無いわ。』

『知ってる 己おらあのお寺の坊様、運動會見に行った時居た坊様だつぱい、え姉あねさ。』と常吉が口を挟んだ。

『久しぶりで奈良漬けを喰べた。今度これを少し貰つていかうかしら。』とお藤は笑顔になつた。

『あのお寺の私の居る部屋の前に、吊し柿が一つぱい吊る下ってるの、もう黒うくなつて見るたびに喰べたくつて喰べたくつて。』

『それこそ一つでも盗ったらをばさん大騒ぎだつぺ。』とおよねが言つて笑つた。

『何かやお藤、學校は何日頃から休暇になるんだ？』

『もう一週間ばかり過ぎると……しかし其翌日から直ぐに兒童心理學の講習があるからやつぱり出なくちやならないんです。』

『兒童心理學？ ふうむ大したもんだな。』と主人は無闇に感心する。

『常や、あの佛様の引き出しから兄にちやの寫眞持つて來て見ろ、お藤はまだ見なかつたつぺから。』とおよねは子供を抱えたまゝ茶碗を持つて箸で指圖をした。

『此間なアや、定が寫眞をうつしてよこしてな。』と主人は引き取つて手札形の薄い紙をふうと吹く。

『いゝ番頭になつた。』と、も一度自分も目を通してお藤に渡した。

『まあ大きくなつたこと。』

鳥打帽を冠つて股の太いズボンを履いて、黒い靴下で脛を締めて靴を履いて居る。前掛を三角に疊んで帶に挟んだところは如何にも商家の者らしく見える。自轉車を横に持つて足を片々斜めにして立つて居るのあ。何處にか使ひに出た途中寫したものと見える。裏を反して見ると、辻藥種店内定吉十七歳と、もとよりは餘程手馴れた筆で書いてある。

『背が随分高くなつたやうですね。』といひ乍ら、お藤は顔が少し好男兒式に寫つてゐるが、写真屋が作つたのだらうと思つた。

定吉はお藤の弟で昨年の春からKといふ町へ商業見習ひにやられて居る。

下戸の主人は一本の酒に眞赤になつて後れて飯を掻き込んだ。酔ふといつもの癖で、何時の間にか屏風の影に鼾の音をたてゝ居るのを、

『お父つあ、お父つあ、貴夫それ今夜無盡だつていふのに、瓦屋さ行がなくちやなるまいぞい。』とおよねは頻にゆすぶり起した。

臺所に出て水をがぶがぶ飲んで、提灯をつけて主人が出て行つたあと、白くれたやうな定吉の復習の聲を聞きながら、お藤は襦袢の袖の切れたのを繕つた。ふと氣がついて見

ると今着ている羽織の袖口も直さなければならなかった。袂の先は黒板をこすると見えて白墨の粉でひどく汚れて居る。

殆ど一日子供にちききりのおふねは、いつかまた炬燵の中に音がなかった。

このやうな日が三百五十遍ばかり繰り返されて来た時に、およねはやはり同じやうなだらしの無い格好をして二つになった子供を抱えて居た。

主人は相變らずせつせと簀むろに出入しながら、此春彌々上京して職業學校にはいったお藤あるじに就いて起った縁談を、今のうちに嫁やらうか、それとも卒業させて立派な月給取りにしようかと迷って居る。

氷人なこうとは村の學校の校長で先方さきは判事とか言つたさうな。

北海道からは正月になって男の子が生れた通知があつた。

十年ばかり経つたなら、お藤も二三人の子を持つて居るのだらう。

底本…「水野仙子全集」第二卷

初出…「文章世界」明治四十三年十二月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年五月二十八日

[リンク…水野仙子ホームページ](#)